

## 編集後記

ロシアのウクライナ侵攻によって国際社会に激震が走っている。ウクライナ情勢の今後の展望はもとより、どのように収束されるかわからないが、それがどのような形になるかにかかわらず、その結果、国際社会は構造的変容を強いられ、従来のものとは異なるものになることは間違いない。後の歴史家は今起きている出来事をどのように記述するのだろうか。

本号は、2021年度にアジア・太平洋研究センターが主催した講演会の報告書などを内容とするセンター報です。アジア・太平洋研究センターでは国内外で積極的に研究発信している研究者、専門家に報告をお願いしてセンターとしての学術活動の一環として参りました。ところが、2020年初頭からのコロナ禍によって対面の講演会が難しくなったこともあり、2020年度以降オンラインによる講演会を開催して学内外に発信してまいりました。ただ報告者の来訪を前提としていた従来の講演会に比べて日程調整などが簡素化され、オンラインによる講演会の新たな可能性を見いだすことができたことも事実です。そうした利点を活かしつつ、2021年度はシリーズ「中国と向き合う」を企画し、さまざまな分野の中国研究者から中国を分析してもらいました。5回にわたる講演会は、既述のようなロシアのウクライナ侵攻は予想もできないタイミングで開催されましたが、ウクライナ情勢を契機とする国際社会の構造的変容の中で中国の動向がきわめて大きな意味を持つことは間違いありません。シリーズ「中国と向き合う」はそうしたより中長期的、普遍的視角からも意味のある講演会だったと自負しています。昨年度のシリーズ「朝鮮半島を俯瞰する」同様、機会を見ながら第二期「中国と向き合う」を企画したいと考えています。

また、その他の単独講演会、「ミャンマーの国家と社会：クーデター前後の展開に注目して」、「武漢の名所を訪ねて——漢口旧租界・中山艦博物館——」、「イスラエル・パレスチナ関係に見る中東情勢」もそれぞれ時宜にかなうテーマであると同時に普遍的な問題意識に寄与する重要な講演会だったと言えます。また、「稀代のスパイ・ライテックの論理」とのタイトルでご講演いただいた原不二夫先生には講演テーマに基づく論稿をいただき玉稿を掲載することができました。今後も講演会報告に加えてさまざまな論稿を掲載できればと考えております。

アジア・太平洋研究センターは、今後もさまざまな形でアジア・太平洋地域に目を向け、本学のみならず周辺の地域社会にも貢献できるよう研究の発信に努めていきたいと考えております。皆様より引き続きご教示・ご協力を賜れば幸いです。

平岩 俊司  
(2021年度アジア・太平洋研究センター長)

## 南山大学アジア・太平洋研究センター報（第17号）

2022年6月30日発行

編集兼発行人 南山大学アジア・太平洋研究センター  
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18  
電話 (052)832-3111(代)  
FAX (052)832-6825  
e-mail center-asiapacific@nanzan-u.ac.jp  
南山大学ホームページ  
<http://rci.nanzan-u.ac.jp/asiapacific/ja>  
代表者 平岩 俊司  
(アジア・太平洋研究センター長)

印刷所 名鉄局印刷株式会社  
〒450-0003 名古屋市東区中村区名駅南3-13-23  
電話(052)561-3271(代)